

大空への鎮魂

第29号 平成30年(2018)4月20日

特定非営利活動法人
旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会
発行者 臼田 智子

ホームページ

<http://www.okegawa-hiko.org>

桶川市が復元に向けて動き出しました。平成30・31年度の復元工事に、約5億円の予算が措置されたのです。市と協定しているものづくり大学(行田市)の横山教授の、東京オリンピックの年に竣工したいという提案に対し、市は明確に答えていなかったため、工事は先延ばしと推測していましたが、小野市長の意気込みは大変なものでした。この規模の木造戦争遺跡の解体復元は全国で初めてで、戦争遺跡の研究者が注目しています。

2年後の完成に向けて、完成した施設の運営と歴史資料の展示方法の研究も必要となるでしょう。飛行学校の歴史をどんなふうに伝えていくか、歴史の正確な伝え方には、元整備員の柳井さんをはじめ当時の関係者の生の声が必要となるだろうと、現物がなくなって意気消沈していた会員には大きな励みになっています。



記録映画用に本会で制作した当時の飛行学校のCG画像

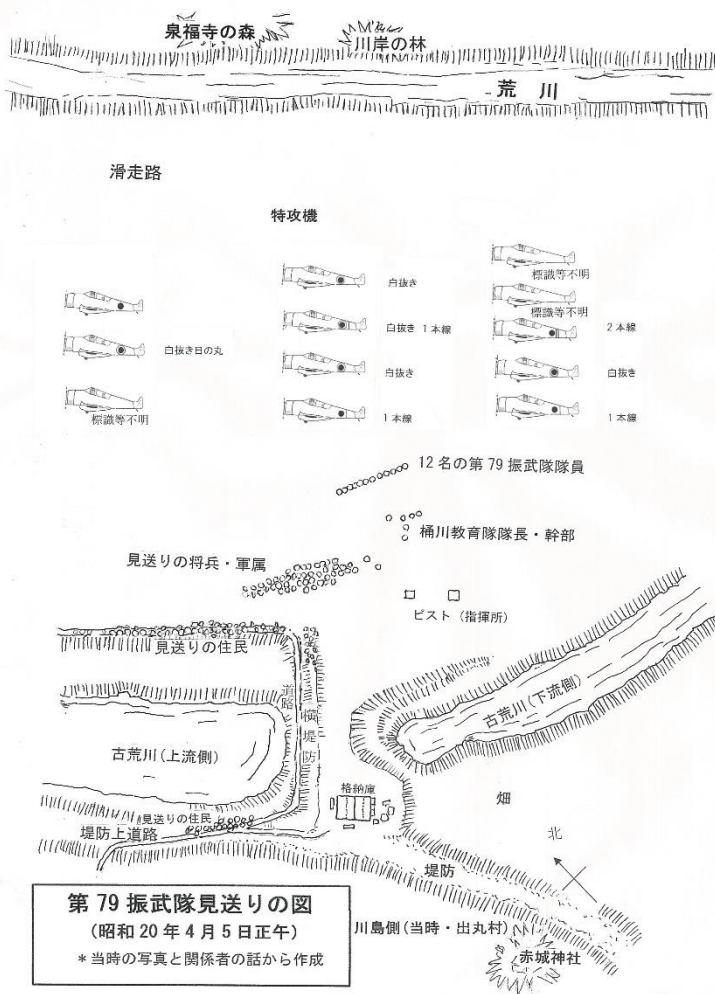
(記録用DVDの映像から CG制作：井戸田英敏氏)

昨年、本会の調査資料に基づいて昭和18年頃の飛行学校の全景をCG(コンピュータグラフィックス)で復元し、解体前の映像と合わせて20分の記録映画を制作しました。映画では、個々の建物についてCGを使って解説を施してあります。

この記録映画は、本年2月の東京ビデオフェスティバルで、アワード賞を受賞(130作品中の41作品)しましたので、現在、インターネットで『戦争遺産 熊谷陸軍飛行学校桶川分教場』または『東京TVF2018』と検索すれば見ることができます。

(注) 上記CGは、昭和20年秋に解体されてしまった裏の講堂や、隊長室のある管理棟、正門前の燃料置場なども含めた学校の全景であり、ものづくり大学が復元設計に際して制作したCG映像とは異なります。したがって、これらすべて復元されるわけではありません。ものづくり大学では「復原」の文字を使っていますが、本会では一般的に使われる「復元」の文字を用いました。*カラー映像はホームページでご覧ください。

特別攻撃隊第79振武隊の見送り風景を、当時の写真と大野昭二元整備員の証言にもとづいて、描いてみました



次のページの写真と見比べてください。ご意見がありましたら、ご指摘ください。A～Hは写真を指す。

- (1) 当時の滑走路は、記録によると300×2,000mで、右の写真などから現在のホンダ航空の滑走路より若干手前、つまり堤防側(格納庫側)にあり広々としていたと思われる。
- (2) 現在の横堤の先端から内側約20メートルの所には、吹き流しを固定していたと推測されるコンクリート塊が残存していることとGの写真から、当時の横堤はもう少し短かったと推測。Bの写真は現在の横堤の先端から撮影したものの。
- 横堤先端の20～30メートル先には滑走路の向きに沿って2尺の木製蓋つきの排水溝があった。(C)
- (3) AとHは、送り出す側の教育隊長や幹部の並びが違うこと、式台がないことから、Aは訓示後、移動して見送りの人たちに挨拶をしているところではないか。

桶川飛行学校の滑走路は荒川右岸の河川敷にあり、上記イラストで、手前の川島町側からみると飛行機が並んだ向こうには大正年間に改修されてまっすぐになった荒川があり、その先には泉福寺の森が見えるという特徴的なもの。洪水の際の水流を弱めるため、「横堤(防)」といわれる堤防が川島側の堤防から直角に突き出ている。格納庫は昭和15年、この横堤を下流側(右方向)に崩した広場に建設し、同年2月1日に落成式を行っている。木造で47メートル×38メートル、三角屋根で2棟がつながっている。

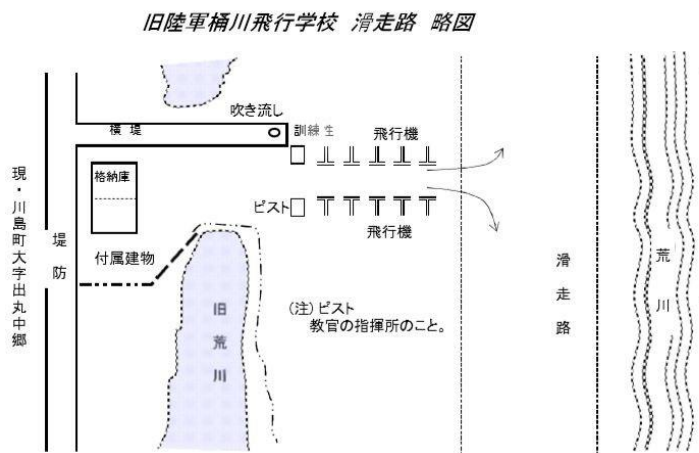
12名が整列して見送りを受けている写真は、当時、教官だった多田計之(ただかずゆき)さんが撮影したもの。3列に並べられた12機の特攻機のうち、5機写っているFの写真が何列目の写真かがポイントだったが、白抜きの日の丸の飛行機の並び方や白線の1本または2本ある飛行機の並びなどから、上記のような並びだったと推測した。

特攻機は、あちこちの飛行場からかき集めた高等練習機を戦闘機のように暗い色の塗装をし(塗装をしたのが全機かどうかは不明)、79振武隊の標識を描いたものだが、胴体の色の濃淡や日の丸の描き方などがバラバラである。白線2本は隊長機、1本は3機ずつの編隊の長機(先頭)と思われる。



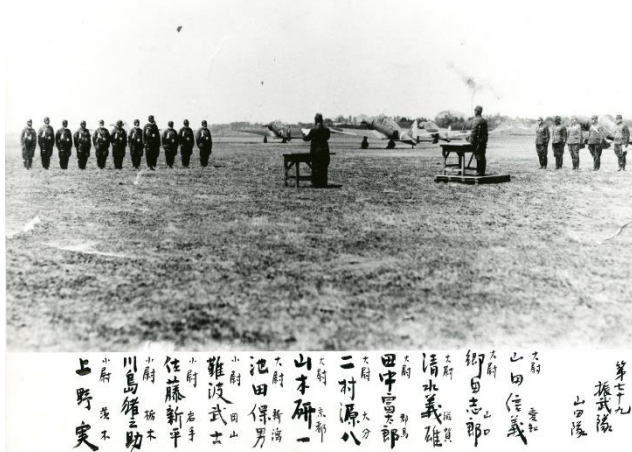
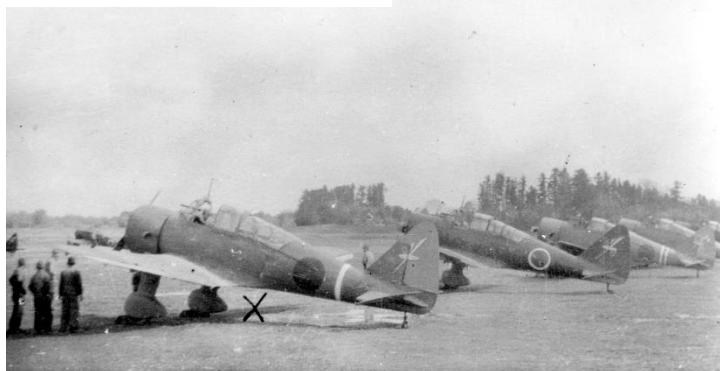
A 見送り風景(上)
B 現在(横堤先端から)

C 記念写真(上)
D 別れの盃(下)



G 通常訓練時の生徒と横堤突端の吹き流し
H 79 振武隊への訓示(下)

E 通常訓練時の配置(上)
F 79 特攻機出発前(下)



平成31年度末の完成を目指して

桶川飛行学校建物5棟 復元工事 予算5億

桶川市は平成30・31年度に、熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の復元工事予算5億1千8百万円を計上しました。うち、30年度は3億3千6百万円です。

飛行学校建物は、平成28年度に調査解体、29年度に設計が行われていましたが、今まで、具体的設計内容や完成スケジュール、完成後の運営方法などは明らかにされてきませんでした。歴史資料を保管・承継している本会にも何らコンタクトはなく、市が多方面に費用の掛かる事業を抱えている現在、工事は保留若しくは延期と推測していただけに、提携し

ているものづくり大学横山教授が提案していた「2020年、東京五輪の春に完成」は、大きな驚きです。

戦争遺跡保存全国ネットワークでも、平成26年の全国大会で本会が発表したことを契機として、全国に例のない老朽化した木造建物群の保存・復元ということで注目されています。同ネットワークで議論される遺跡の多くは、戦時の鉄筋の建物や地下壕、掩体壕など強固な構築物の場合が多く、現物を一旦解体してから復元するという「戦争遺跡保存」の評価は、強固なものさえも、もはや老朽化や地震などで崩壊の危険にさらされている今日、大きな議論の焦点になるものと思われます。

一方、桶川飛行学校は完成後にどんな展示、どんな運営方法とするかは明らかにされていませんが、建築だけが先行し、かつてのバブル時代に言われた、ただの“自治体の箱もの行政”にならないよう、早急にこれらソフト面の研究を開始する必要があると思われます。

予算額	336,055千円
事業の背景・目的	「旧熊谷陸軍飛行学校桶川分教場」は、昭和12年に設置された建物が一群となって現存する希少性の高い遺構である。 平成27年3月には学校法人ものづくり大学と官学連携協定を締結し、現在、この貴重な遺構を保存・活用するための整備事業を推進している。また、平成28年2月には、市指定有形文化財として指定されている。
事業の概要	平成30年度から2か年の継続事業として、文化財建造物である建物5棟（守衛棟、車庫棟、兵舎棟、便所棟、弾薬庫）の復元整備を行う。 【主な内容】 ○復元整備（2か年） 518,198千円 ・整備工事 490,000千円 〔平成30年度 320,000千円〕 〔平成31年度 170,000千円〕 ・監理等委託 28,198千円 〔平成30年度 14,099千円〕 〔平成31年度 14,099千円〕 ○その他の経費 1,956千円
問	担当課 市民生活部 道の駅・飛行学校跡地整備課

DVD 販売中 『熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の歴史を語り継ぐ』 800円 送料200円

- 3編収録
- ① 「熊谷陸軍飛行学校桶川分教場」（17分5秒）
熊谷陸軍飛行学校桶川分教場の概要解説
 - ② 「紙芝居 海へ向かった練習機」（19分15秒）
特別攻撃隊第79振武隊が出発して九州に向かう途中のエピソードを紙芝居で解説
 - ③ 桶川飛行学校跡写真（2分50秒）



切手1,000円分同封し事務局まで。

大野昭二さん 元整備員

(勤務) 昭和 16.4 ~ 昭和 20.10 頃



柳井政徳さんと大野昭二さん（平成 23 年 1 月）

私は、昭和 2 年 3 月生まれで、現在の本田航空(株)社屋から川島町側 2、3 百メートルのところに家があり、義兄が飛行場で整備員をしていた関係で、昭和 16 年 4 月に飛行学校に入り、終戦後の秋まで整備員として勤めていた。

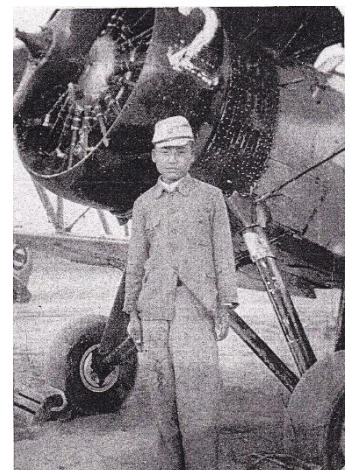
初任給は 21 円、昭和 20 年 8 月には 27 円だった。作業服は支給され、昼は基本的に弁当持参であったが、学校の食事も割合良かったようだ。8 時半から午後 5 時までの勤務で、学校本部の守衛所にあったタイムカードを押してから、格納庫の方へきて、飛行機の整備員として働いていた。夜間飛行訓練の時は時間外手当もついた。「機付見習」から一人前の「機付」になると、担当の飛行機が決められ、飛行機のタウンネンドリング（ボディの先端でプロペラの出ているところ。ボディカバーのように見える）に、数字を白い石灰で書き込んで担当機が分かるようにしていた。

飛行機は 20 機ぐらいあったと思う。自

分の担当する飛行機が訓練中のときは滑走路で待機していて、終了後は整備作業をした。

飛行兵は、召集下士官が割合多かったが、後半は特別操縦見習士官も入隊してきた。訓練生は、幹部候補生としてもてはやされていたが、訓練中は着陸の仕方が悪いと教官から殴られたりして、気の毒だった。教官は、離着陸だけでできればいいんだと、冗談を言っていた。今思うと、特攻隊のことが頭にあったのかもしれない。少年飛行兵の桶川での訓練は 6 か月ぐらいだったが、昭和 19 になると、短縮されて 3、4 か月になった。特別操縦見習士官第 1 期生(昭和 18 年 10 月入校)の富永靖(陸軍次官富永恭次の息子)は、私が機付だったころ、日曜日に私の家(現川島町出丸下郷)に遊びに来たことがある。昭和 19 年頃から燃料不足になってしまい、あまり飛ばなくなる一方、米軍の B29 が来襲し、飛行機の翼を外して手押しで運搬し、川島町側の山林に隠したこともある。

特攻隊を送り出した時のことを覚えている。近所の多くの人が土手(堤防)に集まり見送った。隊員と家



当時の大野さん

族は兵舎で最後の面会をしたようだ。出発のとき隊員一人ひとりから挨拶があり、とても緊張していたようだった。私はテントの中で見送ったと思う。

終戦の昭和20年8月15日直後、青年将校に不穏な動き(宮城に突っ込む)があるとの

ことで、飛行機のプロペラを取り外した記憶がある。終戦直後、飛行場の管理に米軍が進駐してきて来て緊張した。

最後に、当時の整備班の編成をあげておく。

(さいたま市岩槻区在住)

<整備班の編成>

整備隊長:浅見中尉

副班長:田口雇員—出口曹長—町田雇員—須賀雇員・星野雇員

①第1班長・大野昭二=1号機から5号機(笹岡栄整備員たち)

②第2班長=6号機~10号機

③第3班長=11号機~15号機

各機に機付、機付見習など

埼玉県主催の共助コン ミニシンポジウムに参加

~本年1月13日 川越 ウエスタ川越にて~ 事務局長が発表 会長ら会員7名参加

「次代へ残したいもの 市民活動で盛り上げよう」と題して、埼玉県共助社会づくり課主催の、市民活動を活発にしようとするイベントが開かれました。ほかの3つの市民活動グループとともに本会も参加し、それぞれの活動状況などが発表されました。本会は文化遺産を残す方向に行政を動かした成功例として出席要請があったもので、飛行学校の歴史というより、団体の活動方法や兵舎が文化財指定されて復元に動き出すまでの経過などが主な発表内容でした。本会以外の参加市民団体は次のとおり。

- 一般社団法人川越織物市場の会
- 飯能の文化遺産を活かす会
- NPO 法人小川町創り文化プロジェクト



ゼロ戦のプロペラを入手

今年1月、知覧特攻平和会館の八巻専門調査員から、ゼロ戦のプロペラ1枚が送られてきました。

宮崎県新田原飛行場近くの鉄工所で戦時中から保管されていたものを、収集家が処分するにあたり、特攻平和会館に話が持ち込まれたようです。

可変ピッチの機構があり、飛行機が21型か52型かは会員の伊藤さん(右)が調査中ですが、プロペラは住友ハミルトン製と考えられます。

仲介していただいた鹿児島市の元五洋建設社員-^{いそ}射し園教男さんと会館の八巻さんには感謝申し上げます。

長さ143センチ、最大幅26センチ、重さ20キロ



<編集後記>

昨春秋、自主制作のDVDを会員と協力いただいた方(計400人)に送りしましたら、会員以外からもお礼の手紙やご寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。会費の納入も有難うございます。会事務局として改めて頑張らなければという思いを強くしました。

なお、桶川市役所所管の「保存基金」への寄付は本会の保存要望の趣旨に沿うもので有難いのですが、本会とは直接関係はありませんので、誤解のないようお願いいたします。今後ともご支援をお願いします。

[発行]

特定非営利活動法人

旧陸軍桶川飛行学校を語り継ぐ会

会長 臼田 智子

(法人住所) 桶川市西2-4-21 会員約100名

[事務局] 〒350-0133 *お手紙は事務局に

埼玉県比企郡川島町表403(鈴木)

電話(携帯)090-2554-7429